

福井県では1月6日より災害支援ナースの派遣を開始しました。

第一陣の6名（福井大学医学部附属病院2名、福井県立病院2名、福井県済生会病院2名）が被災地に出発し市立輪島病院で活動してきました。

福井大学医学部附属病院 橋本文

福井県看護協会の要請により能登半島地震の被災者対応のため1/6-1/9の間、市立輪島病院で活動しました。金沢と能登半島とを直結する「のと里山海道」は土砂崩れと陥没。そして発災後最初の連休だったため、近隣に住んでいる方が安否確認と物資搬送に往来することで渋滞し、到着するまでに通常の4倍以上の時間を要しました。

到着後は市立輪島病院では病棟スタッフとして活動しました。保清、環境整備、食事介助や処置など病棟業務全般（準夜勤務、深夜勤務を含む）に携わりました。病棟では災害急性期を過ぎ、ほとんどの患者が金沢市内の病院に搬送されていましたが、「能登を離れたくない」と病棟に残っている高齢患者も少なくありませんでした。また、「倒壊して帰る場所がない。話を聞いてほしい」、30分毎に感じる余震で「怖いので安定剤が欲しい」など被災者の方の不安に寄り添い、話を傾聴しました。支援者でもあり被災者でもある市立輪島病院の看護師は、発災後より自宅に帰らず、2日間家族の安否が分からないまま気丈にも患者対応をされている方や、自宅が倒壊して帰れず病院で寝泊まりを続けている方が多く見られました。

現在も断水が続き、生活用水は届くようになりましたが、感染対策が追い付かず避難所でのインフルエンザやコロナウイルス感染症が広まっています。一日も早いライフラインの復旧が望まれます。

